

【 復活讃詞 第6調 】

てんしのぐんなんぢのはかにあらわれしに、
天使軍爾墓あ現。

ばんぺいしせしもののごとし、マリヤはか
番兵死者如墓。

にたちて、なんぢのいさぎよきからだをたづね
立爾潔か體を尋。

た。り。なんぢはぢごくにいざなわれず。
爾地獄誘。

して、ぢごくをとりにし、いのちをた
地獄虞を命賜。

もうものとして、しよぢよにあいたまえり。
者處女逢給。

しよりふくかつせししゅよ、こうえいは
死復活主光榮。

なんぢにきす。
爾歸す。

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光榮父子聖神歸今。

いつもよよに、アミン。
何時世世。

しととひとしくどうぞなるもの、ちゅう
使徒等同座者忠。



じつにしてしちなるハリストスのえきしゃ、せい
實 神智 役者 聖
なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい
神 撰 笛 愛
にみちた るうつわ、わがくにのこう
満 器 我 國 光
しょおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
照 者 亞使徒主教聖
よ、なんぢのぼくぐんのため あめ、および
爾 羊 群 爲 及
ぜんせかいために、いのちをたもうせい
全世界 爲 生 命 賜 聖
さんしゃにいのりたまえ。
三者 祈 給

司祭) (黙誦： せい かみ せいじゃ うち いこ せいさん こえ もつ かしょう
聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
へるヴィムより さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう
讃榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と
なし、ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ
人、爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
をた われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい
立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
る祭壇の光榮の前に立ちて、なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの
祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讃榮を奉るに堪うる者と
なしししゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ
主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
をせい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい
聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
しょうしんぢょ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われら こうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋 我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖 神 聖 勇 毅 聖
じょうせいのものよ、われらをあわれめ
常 生 者 我 等 憐
よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖 神 聖 勇 毅 聖
なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
常 生 者 我 等 憐
めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖 神 聖 勇 毅
せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
聖 常 生 者 我 等 憐
れめよ。こうえいはちちとことせいしん
光 榮 父 子 聖 神
にきす、いまもいつもよよ世に、アミン。
歸 今 何 時 世 世
せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せいなるかみ、せいなるゆう
 聖 神 聖 勇
 き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを
 毅 聖 常 生 者 我 等
 あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第6調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに福を降し給え、

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに
 主 爾 民 救 爾 業
 ふくをくだしたまえ。
 福 降 給

誦經) 主よ、我爾に呼ぶ、我の防固よ、我が爲に黙す母れ、

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに
 主 爾 民 救 爾 業
 ふくをくだしたまえ。
 福 降 給

誦經) 主よ、なんぢのたみをすくい、



なんぢの ぎょうに ふくをく だしたま え。
爾 業 福 降 給

【 使徒經 (アポストロス) 116 端 ロマ書 15 章 1~7 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルが ^{じん たつ} ロマ人に ^{しよ よみ} 達する書の讀、

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、^{われらつよ} 我等強き者は ^{もの つよ} 強からざる者の ^{もの よわ} 弱きを ^お 負いて、^{おのれ} 己を ^{よろこ} 悦ばしむる可からず。我

^ら 等 ^{おのおの} 各 ^{そのとなり} 其 ^{よろこ} 鄰を ^{ぜん} 悦ばしめ、^{もつ} 善を ^{そのとく} 以て其 ^た 徳を ^{いた} 建つるを ^{けだし} 致すべし。蓋 ^{おのれ} ハリストスも ^{おのれ} 己を

^{よろこ} 悦ばしめざりき、^{すなわちしる} 乃 ^{ごと} 録されしが ^{いわ} 如し、^{なんぢ} 云く、^{はづかし} 爾を ^{はづかしめ} 辱むる ^{われ} 辱 ^{およ} は我に及べりと。

^{およ} 凡 ^{むかししる} ぞ昔 ^{もの} 録されし者は、^{みなわれら} 皆我等を ^{をし} 訓えん爲に ^{ため} 録されたり、^{しる} 我等が ^{われら} 忍耐と ^{にんたい} 聖書 ^{せいしよ} の ^{なぐさめ} 慰藉と

^{もつ} を ^{のぞみ} 以て ^{まも} 望を守らん爲なり。^{ため} 願わくは ^{ねが} 忍耐と ^{にんたい} 慰藉とを ^{なぐさめ} 施す神は、^{ほどこ} 爾等に ^{かみ} ハリストス・

^{したが} イススに ^{たがい} 循いて ^{おもい} 互に ^{おな} 意を ^{たま} 同じくすることを ^{なんぢら} 賜わん、^{こころ} 爾等が ^{いつ} 心を ^{くち} 一にし、^{いつ} 口を一に

^{かみわ} して、^{しゆ} 神我が ^{ちち} 主 ^{さんえい} イスス・^{ため} ハリストスの ^{ゆえ} 父を ^{なんぢら} 讚榮せん爲なり。故に ^{なんぢら} 爾等 ^{あい} 相納るること、ハ

^{かみ} リストスが ^{こうえい} 神の ^{ため} 光榮の ^{なんぢら} 爲に ^い 爾等 ^{ごと} を納れしが ^{ごと} 如くせよ。

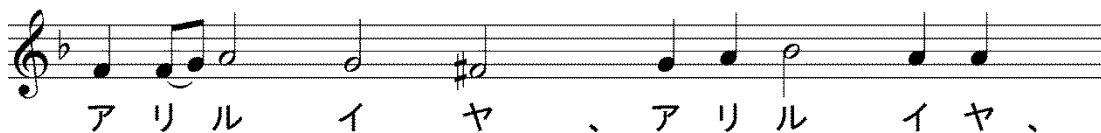
(比較用 口語訳) わたしたち強い者は、強くない者たちの弱さをになうべきであって、自分だけを喜ばせることをしてはならない。わたしたちひとりびとりは、隣り人の徳を高めるために、その益を図って彼らを喜ばすべきである。キリストさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかった。むしろ「あなたをそしる者のそしりが、わたしに降りかかった」と書いてあるとおりであった。これまでに書かれた事からは、すべてわたしたちの教のために書かれたのであって、それは聖書の与える忍耐と慰めとによって、望みをいだかせるためである。どうか、忍耐と慰めとの神が、あなたがたに、キリスト・イエスにならって互に同じ思いをいだかせ、こうして、心を一つにし、声を合わせて、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神をあがめさせて下さるように。こういうわけで、キリストもわたしたちを受け入れて下さったように、あなたがたも互に受け入れて、神の栄光をあらわすべきである。

司祭) ^{なんぢ} 爾 ^{へいあん} に平安、

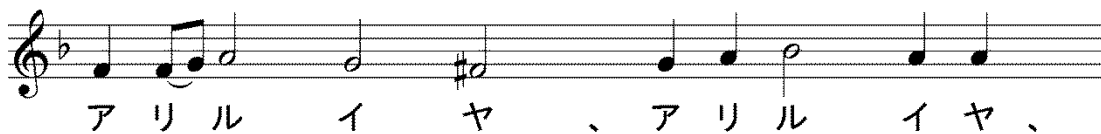
誦經) ^{なんぢ} 爾 ^{しん} の神にも、ア ril イヤ、

【 ア ril イヤ 主日第6調 】

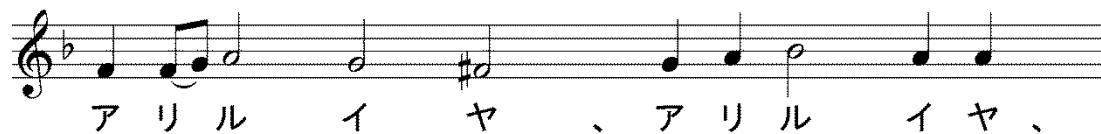
司祭) ^{えいち} 睿智、



誦經) ^{しじょうしゃ おおい} 至上者の覆 ^{した おもの} の下に居る者は、^{ぜんのうしや かげ} 全能者の蔭 ^{した やす} の下に安んず、



誦經) ^{しゅ い} 主に謂う、^{なんぢ われ} 爾は我の避所、^{かくれが われ} 我の防禦、^{ふせぎ われ} 我が頼む所 ^{たの} の我の神 ^{われ} なりと、^{かみ}



司祭) (黙誦: ^{ひと あい} 人を愛する ^{しゅさい} 主宰よ、^わ 我が ^{こころ} 心に ^{かみ} 神を知る ^し 智慧の ^{ちえ} 浄 ^{いさぎよ} き ^{ひかり} 光 ^{かがや} を ^わ 輝 ^{しねん} かし、我が思念

^{め ひら} の目を啓きて、^{なんぢ} 爾が ^{ふくいん} 福音の ^{おしえ} 教 ^{さと} を ^{たま} 悟らしめ ^わ 給え、^{うち} 我が ^{なんぢ} 衷に ^{ふく} 爾の ^{いましめ} 福たる ^い 誠 ^を を

^{おそ} 畏る ^{おそれ} 畏 ^い を ^{われら} も ^{ことごと} 入れて、^{にくたい} 我等が ^{よく} 悉 ^ふ くの ^{およ} 肉體 ^{なんぢ} の ^{よろこ} 慾 ^{ところ} を ^を 踏み、^を 凡 ^を 所 ^を 爾 ^を の ^を 喜 ^を ぶ ^を 所

^{おも} を ^か 思い ^{おこな} 且 ^{ぞくしん} つ ^{せいかつ} 行 ^す いて、^{いた} 属 ^{たま} 神 ^{けだし} の ^{かみ} 生活 ^を を ^を 過 ^を ぐる ^を を ^を 致 ^を させ ^を 給 ^を え、^を 蓋 ^を ハ ^を リ ^を ス ^を ト ^を ス ^を 神 ^を よ、

^{なんぢ} 爾 ^わ は ^{たましい} 我が ^{からだ} 靈 ^{こうしょう} と ^{われらなんぢ} 體 ^{なんぢ} と ^{むげん} の ^{ちち} 光 ^{しせいしぜん} 照 ^を な ^を り、^を 我等 ^を 爾 ^を と ^を 爾 ^を の ^を 無 ^を 原 ^を の ^を 父 ^を と ^を 至 ^を 聖 ^を 至 ^を 善 ^を に ^を し

^{いのち} 生命 ^{ほどこ} を ^{なんぢ} 施 ^{しん} す ^{こうえい} 爾 ^{けん} の ^{いま} 神 ^{いつ} と ^{よよ} に ^を 光 ^を 榮 ^を を ^を 獻 ^を ず、^を 今 ^を も ^を 何 ^を 時 ^を も ^を 世 ^を 世 ^を に、^を ア ^を ミ ^を ン。)

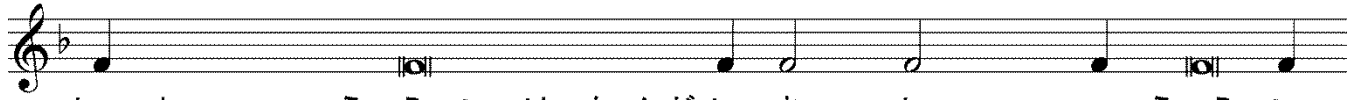
【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 33 端 9 章 27～35 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、^{つつし} 肅 ^た みて ^{せいふくいんけい} 立て ^き 聖 ^{しゅうじん} 福 ^{へいあん} 音 ^を 經 ^を を ^を 聽 ^を く ^を べ ^を し、^を 衆 ^を 人 ^を に ^を 平 ^を 安 ^を 、

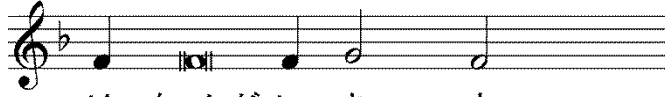


なんぢの し んにも 。
爾 神

司祭) マトフェイ傳の^{でん}聖^{せい}福^{ふく}音^{いん}經^{けい}の讀、^{よみ}



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮



はなんぢにきす。
爾 歸

司祭) 謹^{つつし}みて聽^きくべし、

司祭) 彼の^か時^{とき}イイスス^ゆ往^{ふたり}きしに、二人の^{めしい}瞽^{かれ}者^{したが}彼^よに^い従^こいて、呼^いびて曰^こえり、ダヴィドの子^こイイスス

よ、我^{われ}等^らを憐^{あわれ}め。彼^{かれ}家^{いえ}に入^いりしに、瞽^{めしい}者^{かれ}彼^つに就^{これ}けり、イイスス之^いに謂^{われ}う、我^{これ}之^いを成^なすこ

とを能^{よく}すと信^{しん}ずるか、彼^{かれ}等^ら曰^{いわ}く、主^{しゅ}よ、然^{しか}り。是^{ここ}に於^{おい}て其^{その}目^めに觸^ふれて曰^いえり、爾^{なんぢ}等^らの信

の如^{ごと}く爾^{なんぢ}等^らに成^なるべし。其^{その}目^め即^{すなわ}ち啓^{ひら}きたり。イイスス厳^{きび}しく彼^{かれ}等^らを戒^{いまし}めて曰^いえり、慎

みて人^{ひと}に知^しらしむる勿^{なか}れ。然^{しか}れども彼^{かれ}等^ら出^いでて、其^{その}名^なを遍^{あまね}く其^{その}地^ちに揚^あげたり。彼^{かれ}等^らの出^いづ

る時^{とき}、視^みよ、瘡^{おし}にして魔^ま鬼^きに憑^よらるる人^{ひと}をイイススに携^{たづ}え來^{きた}れるあり。魔^ま鬼^き逐^まい出^いされて瘡^{おし}者

もの^い言^{たま}えり。民^{たみ}奇^きとして曰^いえり、イイスス中^{うち}に未^{いま}だ是^かくの如^{ごと}き事^{こと}あざりき。然^{しか}れどもフ

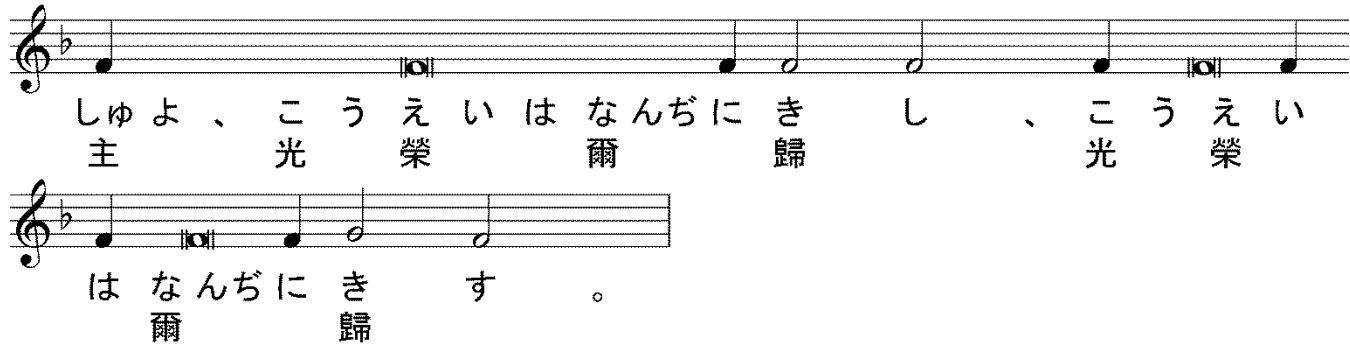
アリセイ等^{らい}曰^{かれ}えり、彼^まは魔^ま鬼^きの魁^{かしら}に藉^よりて魔^ま鬼^きを逐^まい出^いす。イイスス徧^{あまね}く邑^{まち}と村^{むら}とを巡^{めぐ}

て、其^{その}諸^{しよ}會^{かい}堂^{どう}に於^{おい}て教^{おし}を傳^{つた}え、天^{てん}國^{ごく}の福^{ふく}音^{いん}を宣^のべ、民^{みん}間^{かん}の諸^{もろ}の病^{もろ} 諸^{もろ}の

わづらい いや
疾^いを醫^やせり。

(比較用 口語訳) そこから進んで行かれると、ふたりの盲人が、「ダビデの子よ、わたしたちをあわれんで下さい」と叫びながら、イエスについてきた。そしてイエスが家にはいられると、盲人たちがみもとにきたので、彼らに「わたしにそれができると信じるか」と言われた。彼らは言った、「主よ、信じます」。そこで、イエスは彼らの目にさわって言われた、「あなたがたの信仰どおり、あなたがたの身になるように」。すると彼らの目が開かれた。イエスは彼らをきびしく戒めて言われた、「だれにも知れないように気をつけなさい」。しかし、彼らは出て行って、その地方全体にイエスのことを言いひろめた。彼らが出て行くと、人々は悪霊につかれたおしをイエスのところに連れてきた。すると、悪霊は追い出されて、おしが物を言うようになった。群衆は驚いて、「このようなことがイスラエルの中で見られたことは、これまで一度もなかった」と言った。しかし、パリサイ人たちは言った、「彼は、悪

霊どものかしらによって悪霊どもを追い出しているのだ」。イエスは、すべての町々村々を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸 す。

※聖体礼儀③ へ